黄金塚陵墓参考地石室前面部の事前調査

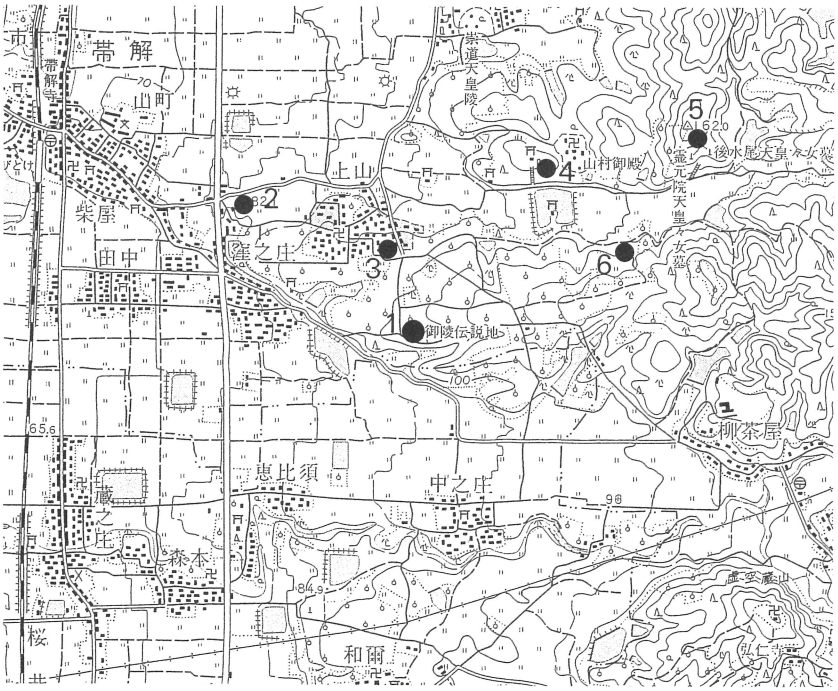
はじめに

本参考地は、天理市との境界に近い奈良市田中町にあり、東から西に下りながら舌状に延びる、傾斜の緩やかな丘陵の南斜面に位置する(第27図)。近隣には山村銅鐸出土地や窪之庄城など各時代の遺跡が分布するが、周辺丘陵の山手に比較的小規模な古墳群が密集しており、その中には甲冑出土古墳として著名な円照寺墓山第１・２号墳が含まれている[1]。また、本参考地と同じ丘陵を西方に下っていくと、初期の馬具や甲冑などを出土した前方後円墳のベンショ塚古墳[2]があり、遺跡の分布は濃密である。

本参考地の墳形は方形で、埋葬施設はいわゆる榛原石を壁体に用いた、南面する磚槨式の横穴式石室である。墳丘と拝所に相当する石室前面部が陵墓地となっているが、東・西・北に高さ最大４ｍに及ぶ大規模な土堤が廻っており、これを含めた少なくとも東西約120ｍ×南北約70ｍの範囲が、本来の規模として考えられている。また、東側の土堤上には、組合式石棺が検出された田中古墳が知られており、近隣にはシズカ塚古墳や円照寺山門脇第１号墳のように、同じく方墳と考えられる古墳が点在している。詳細は不明ながら本参考地との関係が注意されるところである[3]。

陵墓参考地に指定後[4]、本参考地に対しては、過去に２度の調査が行われている。１回目は昭和26年に日本考古学協会の古墳総合研究特別委員会による墳丘・周辺地形・石室の実測及び写真撮影が行われ[5]、その後、昭和33年の当庁による陵墓参考地調査で、昭和26年同様に墳丘・周辺地形・石室の実測及び写真撮影が行われている。

以後、調査が行われることはなかったが、平成16年７月に奈良市より本参考地の南を走る市道拡幅工事計画が提示され、拝所に相当する石室前面部の一部について、用地協力の依頼があった。これに対し、拡幅計画の公共性に配慮する必要はあるものの、対象地が石室前面部であり、何らかの遺構の存在も考えられることから、発掘調査を実施し、遺構・遺物の状況を把握した上で判断することになった。調査期間は、平成16年９月６～13日で、石室前面部約15㎡を調査した。



1　黄金塚陵墓参考地
2　ベンショ塚古墳
3　シズカ塚古墳
4　円照寺山門脇第１・２号墳
5　墓山古墳群
6　山村銅鐸出土地

国土地理院発行 1:25000 地形図「郡山」使用

第27図
黄金塚陵墓参考地
および周辺遺跡位置図
(1/50000)

1　トレンチの概要と層序

トレンチは１箇所で(第28・29図)、規模は東西約５ｍ、南北約３ｍである。トレンチ設定箇所は、局所的には平坦であるが、本参考地周辺は全体的に南に向かって緩やかに下る傾斜地となっている。そして、トレンチから約2.5ｍ南で高さ２～３ｍの崖となり、急激に地形は下り始める(図版９－１)。

調査の結果、土層は最終的に６層が確認された。

Ⅰ層　表土。黒褐色粘質土で、厚さ５～15cm。南にいくほど厚く堆積する。

Ⅱ層　整地土。現在の平坦地を形成する黄褐色粘質土。厚さは10～30cmで、Ⅰ層同様、南にいくほど厚くなる。この土層内には、石列の使用石材と同程度の石が数多く含まれている点、石列の天端をかすめるように堆積していることなどから、一度削られて石列上部を破壊した後、新たに形成されたものと考えられる。土師器細片がわずかに出土した。

Ⅲ層　原初の堆積土。石敷を直接覆う厚さ10～15cmの、緻密な茶褐色砂質土。石敷の間から土師器細片が出土した。

Ⅳ層　石列裏込土。石列を安定させるための褐色系の粘土・粘質土。灰白色基調の粘土ブロックを含み、石材が多く含まれる。詳細については後述する。

Ⅴ層　墳丘盛土。砂礫が多く含まれており、地山起源と思われる明黄褐色粘質土。Ⅳ層に見られたものと同じ粘土ブロックも認められる。トレンチ北壁から裏込の掘方までの幅約40～50cmの範囲で確認した。厚さ約15cmが残存している。

Ⅵ層　地山。礫混じりの堅緻な赤褐色粘質土と均質な褐色粘土の２種類を認めた。

2　検出した遺構

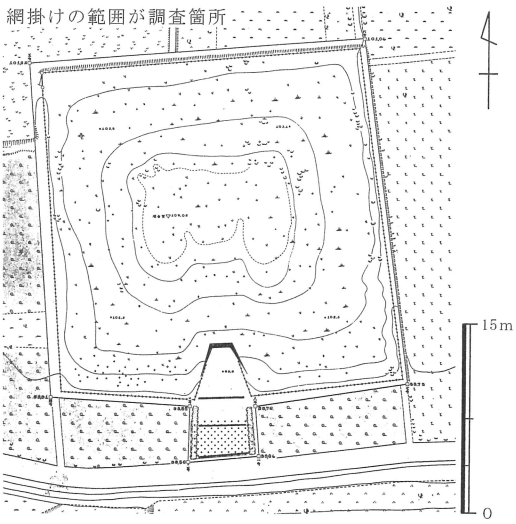
調査の結果、現在の墳丘裾に沿う形で東西方向の石列(石積)を検出し、その南側一面に石敷を検出した(第30図)。いずれも、トレンチ範囲外までの広がりをみせる。

なお、石列・石敷の石種と使用傾向については、後掲の奥田尚氏の報文を参照されたい。

(１) 石列（石積）（第30図、図版10－１）

石列は、北壁から南に１ｍ、地表下約20cmの位置に現状１段で検出した。現在の墳丘裾からは南に約1.6ｍ、石室奥壁からは18.6ｍの位置にあたる。石材は全体的に石敷に使用されたものより大形のものが選択されており、長さが60cm近いものも含まれている。主に、楕円～長楕円形に近い石の長軸を東西方向に向けて設置しているが、ほとんどの石材が全体に前のめりに傾いているように観察された。

また、背後には幅50cmの裏込をもち、最終的に石室中軸線に沿って90cm×60cmの範囲を断ち割った。墳丘盛土(Ⅴ)上から斜めに掘り込まれ、一部地山(Ⅵ)を削り取る形で、標高99.3ｍ付近で平坦となる。石列石材のすぐ後ろに密着するように小形の裏込石が置かれ、さらにそれを支えるように暗黄褐色粘土が詰められている(Ⅳｃ)。断面ではその上に２層を確認したが(Ⅳａ・Ⅳｂ)、これらには小形の石材片が多く含まれていた(第30図２、図版10－３・11－１)。石室壁体に使用されている流紋岩質溶結凝灰岩の存在がやや顕著であるが、石室の壁体に用いるには明らかに小さく、壁体用の石材加工後の廃材が入れられたのであろう。その他、石材以外には粘土ブロックの存在が注意される。灰白色を基調とし、大きいものは40cm×30cmの大きさがあり、意識的に裏込内に入れたと考えられる。



第28図　黄金塚陵墓参考地
墳丘測量図（1/600）昭和２年製図

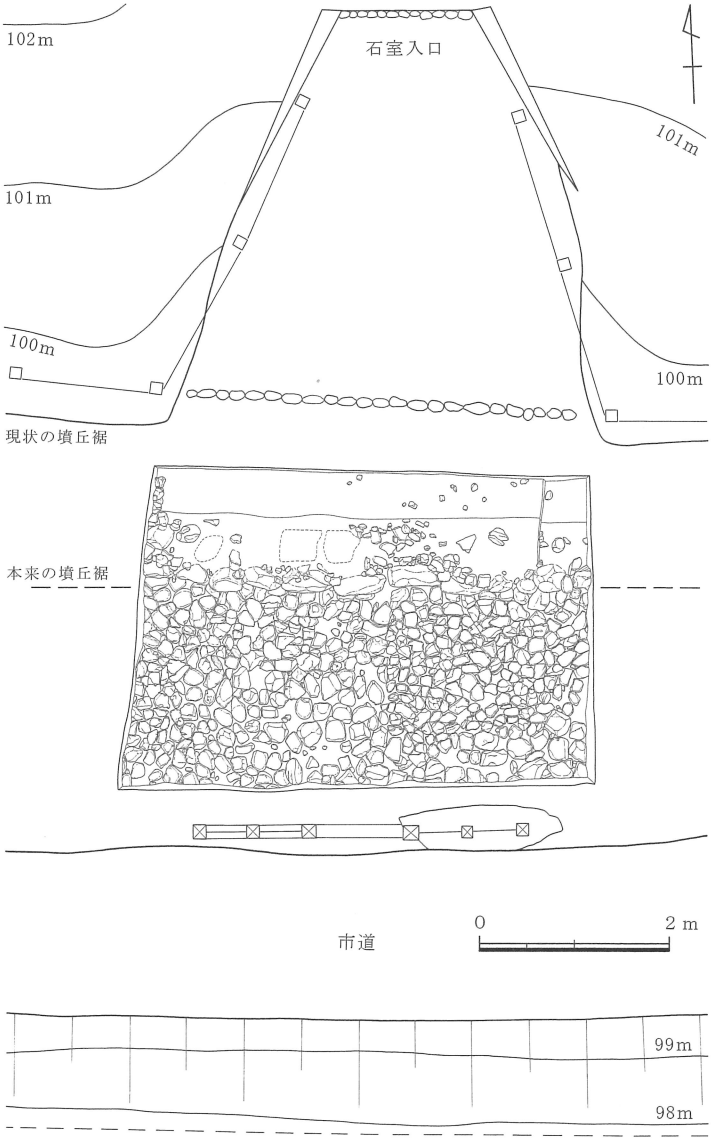
なお、これまで述べた石列及びその検出に至る状況に加え、入念な裏込の在り方からすると、本稿において石列と

した遺構は、本来数段の石積であったと考えられよう。現状で、石室中軸線上にある石列石材の天端と石室床面との比高は約60cmであるが、石列が本来石積であった可能性からすると、想定される石積の天端から石室までの床面は、比較的平坦であったとみられる。

（2）石敷（図版２・９）

石敷は、一部に石が失われた箇所があるものの、ほぼ全面に敷き詰められ、築造時の状況をよく残していると思われる。平坦面を形成しているが、完全に水平ではなく、周辺地形と同様に北から南に緩やかに下っている。一部に厚みのある石が用いられるが、基本的には平石を選択しているようである。また、石列の下には潜り込まないので、石列設置後に敷設されたことがわかる。

具体的な敷設順序は、整然とした石の列も認められないため明らかにし難い。しかし、石の大きさや敷き方によってまとまりが観察できる。これは石種のまとまりとしては対応しないため、敷設にあたり、石が大きさだけで選択されたことを示唆する。具体的には、石敷検出範囲内のうち北東部分の東西約２m×南北約1.5mの範囲が、やや小さめの石が密に敷かれており、長方形の区画に見える。この範囲は一部石室中軸線にもかかっているが、区画を示すような石列はなく、範囲が不明瞭である。遺物の出土も少ないため、意味のある区画か否かについては不明と言わざるを得ない。



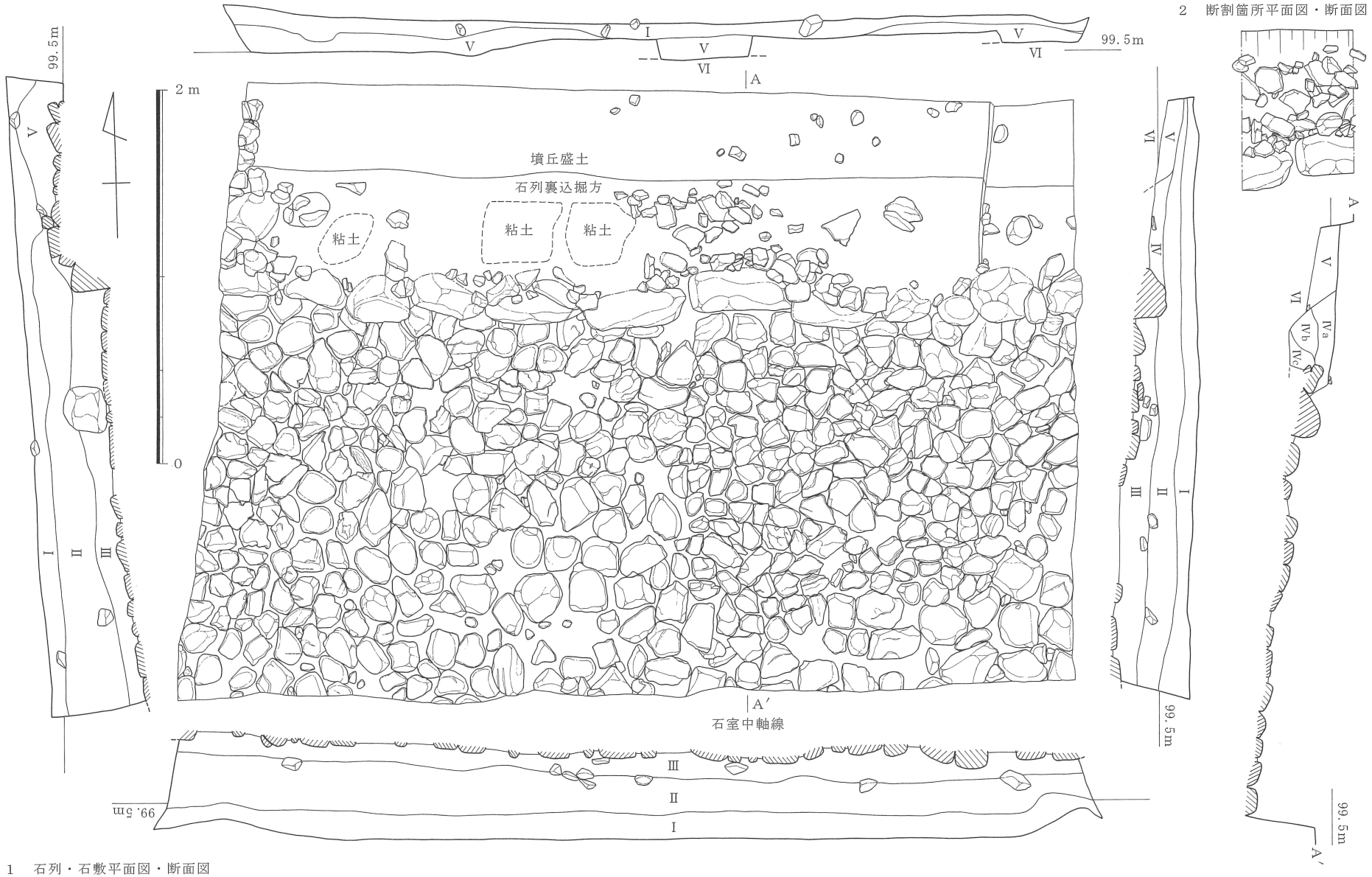
第29図　黄金塚陵墓参考地　トレンチ周辺詳細図（1/80）

3　出土遺物

今回の調査では、土師器の細片がⅡ層から２点、Ⅲ層から16点の合計18点が出土した。原初の堆積土であるⅢ層においても石敷の隙間から破片で検出されたに過ぎない。辛うじて図化できたものを提示したが（第31図、図版11－４）、いずれも杯と考えられ、底部付近の破片と思われる。口縁部など端部の破片がなく、細かい形態は捉えづらい。図化したものも含め、色調は赤褐色～茶褐色を呈している。調整は、多くの破片が摩滅のため不明であるが、判明したものについては内面がヘラミガキと考えられ、滑らかに仕上げられている。現状で暗文は認められない。外面には比較的細かい凹凸が認められ、ヘラケズリの痕跡かと考えられる。

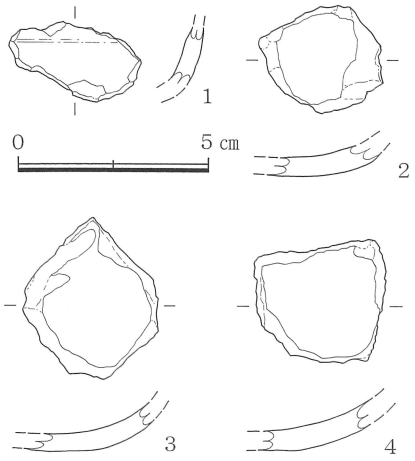
まとめ

調査の結果、石列と石敷を検出した。墳丘裾と考えられる石列は、本来石積であったと推定され、現在の裾より約1.6m前方で検出された。現状で一辺約27mを測るので、単純に今回の数値を充てれば約30mの規模に復元できようか。いずれにしろ、墳丘規模がより大きくなることは間違いない。石列・石敷ともトレンチ



1 石列・石敷平面図・断面図

第30図 黄金塚陵墓参考地 トレンチ平面図および断面図（1/30）



第31図　黄金塚陵墓参考地
出土品実測図（1/2）

外に広がり、良好に遺存することが予想されるが、これらの遺構がどの範囲まで続くかについては不明である。

上記の調査結果を踏まえ、市道拡幅計画に対する用地協力については断ることとし、現地は埋め戻しの後、旧状に復した。

（清喜裕二）

註

（1）　末永雅雄「第３章　１部 第６節　円照寺墓山第１号墳」『奈良市史』考古編、奈良市、1968年。
　伊達宗泰「第３章　２部 第４節　円照寺墓山第２号墳」『奈良市史』考古編、奈良市、1968年。

（2）　森下浩行「ベンショ塚古墳の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度、奈良市教育委員会、1991年。

（3）　小島俊次「第２章 第５節 東山麓地域（１）山村地区」『奈良市史』考古編、奈良市、1968年。

（4）　本参考地治定前後の沿革については、下記文献にまとめられている。
　西光慎治「宮内庁陵墓参考地・帯解黄金塚古墳の沿革」伊達宗泰監修『地域と古文化』、『地域と古文化』刊行会、2004年。

（5）　高橋猪之介撮影「黄金山古墳」坪井清足編『高橋猪之介寫眞集英』（『埋文写真研究』別冊）、埋蔵文化財写真技術研究会、1995年。

黄金塚陵墓参考地の石材の石種とその採石地

奥田　尚

黄金塚陵墓参考地の葺石・敷石に使用されている石材の石種を裸眼で観察した（第32図、第２・３表）。調査地は段丘の上に位置し、礫まじりの粘土層が分布する。使用されている葺石・敷石の石材は表面が滑らかな川原石様のものが多く、露岩を剥がしたような鋭い角が残る石や節理面が顕著な石は僅かである。

当調査地付近は高樋町付近を南北に通る高樋断層により、東側の地質体が800m以上上昇しているために東側に基盤をなしている領家式花崗岩類が分布する。西側には1500万年前頃の中新世に堆積した藤原層群、1200万年前頃に堆積した鮮新世の白川池累層が分布し、その上に段丘をなす虚空蔵山礫層が分布する。藤原層群は主として凝灰岩質砂岩からなり、豊田山付近では石材として採掘されたようであるが、当調査地点の石材には１点も認められない。チャートは段丘礫層中の礫に認められる。当遺跡の南方を流れる菩提仙川の流域に分布する片麻状黒雲母花崗岩中には斑糲岩やペグマタイトが岩体として含まれる。特に北椿尾から興隆寺にかけての付近にはペグマタイト脈が多く見られる。

このような地層や岩石分布を後背地にもつことから菩提仙川の川原石には斑糲岩・ペグマタイト・片麻状黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩等、北方を流れる地蔵院川にはチャート、黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩等がみられる。

1　石材の石種と採石推定地

葺石・敷石に使用されている石材の石種は、中粒アプライト・細粒黒雲母花崗岩・中粒黒雲母花崗岩Ａ・中粒黒雲母花崗岩Ｂ・中粒斑糲岩・粗粒斑糲岩・片麻状粗粒アプライト・片麻状細粒黒雲母花崗岩・流紋岩質溶結凝灰岩・石英斑岩・チャートである。石種の特徴と採石推定地について述べる。

中粒アプライト：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒

図版２

１　黄金塚陵墓参考地　調査区　全景（南西から　写真左奥の扉が石室入口）

２　黄金塚陵墓参考地　調査区　全景（東から）

1　黄金塚陵墓参考地　調査区　全景（北から　写真奥の道路南側が崖状に落ちる）

2　黄金塚陵墓参考地　石敷・石列　西半部（南から）

3　黄金塚陵墓参考地　石敷・石列　東半部（南から）

図版10

1　黄金塚陵墓参考地　石列詳細（中央付近）

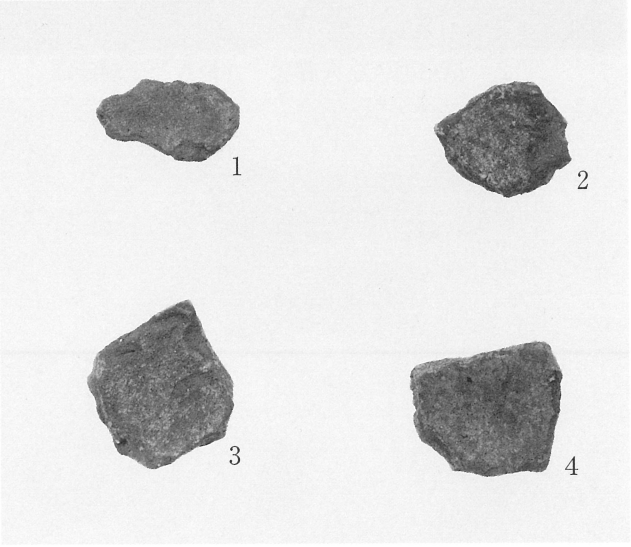
2　黄金塚陵墓参考地　調査区　土層断面（東壁）

3　黄金塚陵墓参考地　石列掘方　断割箇所（南から）

1　黄金塚陵墓参考地　石列掘方　断割箇所（詳細）

2　黄金塚陵墓参考地　石列掘方　断割箇所（完掘状況）

3　黄金塚陵墓参考地　石列掘方検出状況



4　黄金塚陵墓参考地　出土遺物